

俳句

大津俳句会

陰出でて一閃を曳く揚羽蝶

井芹眞一郎

玉苗にたつぷりと水行き渡る

秋山 恵子

夜を覚めて夢なかばやほととぎす

市原 初女

梅一斗漬けたる甕も伏せしまま

江藤 みち

一人では手に負えぬ程草を引く

大塚喜久子

玉解いて句碑の隠れる芭蕉かな

岡崎 浩子

梅落ちたまま熟れたる過疎の家

坂本 セキ

短夜や時計の針の急ぎゆく

佐賀 久子

あぢさゐの雨より生まれたるごとし

原田 順子

雉走る鶏冠とさかの赤の色残し

堀川 妙子

大西日金峰山を染め上げし

松尾 昭雅

明易し港の宿の船の音

渡邊佳代子

小さき手にぽんと跳ね来る四葩かな

森山美穂子

俳句

つのはな句会

木いちご一粒 天草四郎かも

星永 文夫

スマホ撮りの群衆むれ発光して立夏

上杉 波

畳屋に薫風昭和の縁へりおとす

矢嶋 道子

ノルディック野いちごうまし山歩き

水野 春子

白薔薇は可憐に 地球は永遠に

梅木トキエ

吾病みて天道虫は天空へ

塚本 洋子

薔薇園の白の翻意を風運ぶ

榮田しのぶ

麦の秋 出不精の日々裏返す

志賀 孝子

ばわあんとして六月 紙の亀になる

田上 公代

錆すすむ火箸で昭和の夏つかむ

木庭 杏子

短歌

大津短歌会

桜見る心で人ら生きおれば

この世はなべて穏しきものを

渡辺佐代子

桜咲き華やかなりし校庭は

子らの声なく狸が遊ぶ

鞍 岳志

咄どつき嗟さにてかたかな辞典を開きみる「アポなし電話」に身震ふるい為ななり

管野 静

移り来し庭に莖の苗植うる

心寂き明日の日のため

吉永 恵子

盛りあがる山より降ろす緑風が

仄かな香のせ頬をなでゆく

豊岡ミツル

新緑に風の当りてきらきらと

優なごしき光に心和なごめり

小平 善行

短歌

万年青短歌会

マラソンの四三の生家訪ね旅

わが筋トレも一年を経へし

磯崎テル子

天皇の退位と即位を寿ぎて

国歌を歌い万歳呼ぶ

山内 信子

ほととぎす鳴くを聞きたり午前四時

田植のあとの静かなるとき

中山 春代

花の宴終りし岡は若緑

朝戸を開けて鳥の声聞く

合志 桃花

北里に生家訪ねし遠き日よ

紙幣更新われさえ嬉し

合志 妙子

うつし世の残生の旅を今日も行く

一人で行かねばならぬ道あり

河北 幸一